

純粹経験には「意識」も「思考」も「作用」も「証人」もない ～「意識」は存在するのか (W.ジェイムズ著) の批判的分析

2017年4月15日 宮国淳
<http://miya.aki.gs/mblog/>

目次 ※()内はページ

- I. はじめに (1)
- II. 「思考」は“存在”するのか (2)
- III. “措定”されるのは「機能」「作用」の方である (2)
- IV. 純粹経験に「証人」はいらない (4)
- V. 主客の分離を説明するために分離した主客を前提としてしまっている (5)
- VI. 精神と実在への二重化は「文脈」によりもたらされるものではない (8)
- VII. ジェイムズの因果関係に関する認識はひっくり返っている (12)
- VIII. 純粹経験が「まさに現れるとおりのもの」ならば言葉も純粹経験ではないのか (13)
- IX. 価値評価も純粹経験に還元可能である (14)
- X. おわりに (15)

I. はじめに

本稿は、

W.ジェイムズ著・伊藤邦武編訳『純粹経験の哲学』(岩波文庫) 9～45 ページ、
第一章「意識」は存在するのか

の分析である。具体的には、意識・思考、さらには純粹経験に関するジェイムズ理論の問題点を指摘した上で、実際の具体的経験・純粹経験に基づき意識・思考、さらには「作用」とは何なのかを明らかにしていく。

ジェイムズの理論はフッサールの現象学と一致する部分がある上、西田幾多郎の『善の研究』にもかなり影響を与えている。ジェイムズの「意識」さらには「純粹経験」の見解を批判的に分析することで、結果として現象学が依拠する前提を根本的に覆すこともできるし、西田の純粹経験論の不備について指摘することもできるのである。

II. 「思考」は“存在”するのか

ジェイムズは、“存在者としての「意識」というものには疑いをもってきた”（ジェイムズ、11 ページ）ものの、「思考」の“存在”は否定していない。

ところで、ここで「意識」の存在をいきなり否定しようとするれば、あまりにも明らかに馬鹿げたことのように思われるであろうから——というのも「思考」が存在することは否定しようもないであろう——（ジェイムズ、11 ページ）

・・・「意識」が“存在”しない、ということは、私たちの経験として「意識そのもの」という具体的経験などどこにも見つからない、ということであるのだ。では「思考」はどうだろうか？ 私たちは見えるものや聞こえるもの、あるいは感じるものを言葉で表現したり、言葉を読んだり聞いたりすることで、それに対応する実像を指示したり、イメージを思い浮かべたり、あるいは何らかの感情・情動的感覚を覚えたりするであろう。しかしそれらもやはり単なる具体的経験、ジェイムズの言う「経験内容」（後述）なのである。**具体的経験とは、どこまでも「経験内容」でしかない。**果たして、そのどこに「思考そのもの」の経験が現れているであろうか？

ジェイムズは、「意識」と同様に、“「思考」が存在する”という見解もエポケーする必要があったのだ。

III. “措定”されるのは「機能」「作用」の方である

わたしが反対しているのはただ、「意識」というこの言葉が何らかの存在者を表わしているということのみであり、わたしは逆に、この言葉がある機能を表しているということを強調したいのである。わたしがいいたいのは、物質的な事物の素材と対比される意味で、われわれの思考をつくっているとされる原初的な素材とか存在の質などは存在せず、ただ経験のなかにあって思考が果たす機能というものがあり、この機能の作用ゆえにこうした存在の質といったものが措定されることになったということである。この機能とは認識するということである。「意識」は、事物がただ単に存在するばかりでなく、報告され、認識されるもするという事実を説明するためには、どうしても必要だと思われている。したがって、誰であれその第一原理のリストから意識という概念を消去しようとする者も、別の何らかの仕方での機能が果たされることを説明しなければならないはずである。（ジェイムズ、11～12 ページ）

・・・そもそもが「存在の質」とはいったい何なのであろうか？ そしてそういうものが「措定」される必要がいったいどこにあるだろうか？ 経験として現れている感覚、あるいはそれを質感と呼ぶのであれば、それは確かに経験なのである。「思考」がまずあるのではなく、それら具体的経験があるのではなからうか？

経験のなかにあつて思考が果たす機能というものがあり、この機能の作用ゆえにこうした存在の質といったものが措定されることになった

・・・とジェイムズは述べているが、逆に“措定”されているのは「機能」「作用」の方なのである。まず実際に見えたもの・聞こえたもの・感じたもの、さらには実際に浮かんだりしゃべったりした言葉があり、その上で、それらの経験が生じるために「機能」というものがあるのではないかと「仮定」されている、ということなのである。ジェイムズの見解はまったくひっくり返ってしまっているのだ。具体的経験は、「機能」や「作用」の前提などおかまいなしに、ただただやって来るものである。そのとき「機能そのもの」「作用そのもの」は具体的経験として現れることがない。しかし、具体的経験が「なぜ」現れるのか、「いかにして」現れるのか、と問うたとき、はじめて経験として現れない「機能」「作用」が“措定”されるのである。要するに「因果関係」の構築、つまりジェイムズの見解には常に「因果性」への確信という前提があるということなのである。

わたしのテーゼはこうである。もしわれわれが世界の内にはただひとつの原初的な素材や材料のみが存在し、この素材によってすべてのものがつくられているのだという想定から出発するならば、そして、もしもわれわれがこの素材を「純粹経験」と呼ぶのであれば、そのときには、認識するという作用は、純粹経験の特定の部分どうしが互いにもちうる関係として容易に説明できるであろう。この関係そのものが純粹経験の一部分であり、その関係し合う「項」(terms)の一方が認識主観あるいは認識の所有者、認識者となり、もう一方が認識される対象となるのである。(ジェイムズ、12ページ)

・・・ジェイムズの言う「純粹経験」とはいったい何なのであろうか？ これではあたかも純粹経験とは「想定」から出発した・導かれた仮説概念であるかのようだ。ジェイムズの言う「素材」を「純粹経験」と呼ぶという想定のもと、「関係そのもの」も「純粹経験」であるというその“論理的根拠”はいったい何なのであろうか？

さらに言えば、「関係そのもの」を認めたところで、純粹経験の一部分が「認識主観」「認識の所有者」「認識者」となるという“論理的根拠”はいったいどこにあるのだろうか？ 「関係」はあくまで「関係」であり、それ以上でもそれ以下でもない。

ジェイムズの“論理”にはどこにもその“根拠”が見当たらないのである。

IV. 純粹経験に「証人」はいらない

意識はそれ自身としては無時間的なものであって、時間の内で生じる出来事の証人にすぎないのであり、その出来事において役割を果たすことはないからである。それは一言で言えば、ひとつの経験の「内容」の論理的相関者であり、経験の特異性とは、そこにおいて事実が明るみにもたらされるということ、内容への意識化が生じるということにある。こうした意味での意識はまったく非人称的である——「自我」とその活動は内容の方に属している。わたしが自己意識的であるとか、意志を発動するのを意識するとかいうことは、「自我」や「意志の努力」という名前がつけられたある種の経験内容が生じており、そこには証人がいないわけではない、ということの意味しているにすぎない。(ジェイムズ、14 ページ)

・・・問題は、その経験内容を「認識」する「証人」がいったいどこにいるのか、ということである。その「証人」「そのもの」が純粹経験として果たして現れてきているのだろうか？**具体的経験として現れているのはあくまで経験内容そのもののみ**である。それが「認識」された故なのかどうか、純粹経験そのものの事実として実際に現れて来ているであろうか？先に述べたように、**具体的経験（純粹経験）は理論・論理などおかまいなしにただただやって来るものである。それらの経験が「認識」されたものであるのかどうかさえ明らかではないのだ。**

「証人」が必要だという前提は、“対象を認識する主体”という客観概念、あるいは最初にジェイムズが批判しようとした「主観—プラス—対象」(ジェイムズ、13 ページ) という世界観を前提としているのである。決して非人称的なものではなく、あくまで客観存在としての主体、つまり「私」なのである。

ジェイムズはその「証人」を”経験の「内容」の論理的相関者”と説明している。つまり「論理的に」そう考えるべきだという見解である。では果たしてその「論理」とはいったい何を根拠にしているのだろうか？・・・結局それは、ものごと・対象を「認識」する「主体」「主観」が存在している、主体・主観が認識するからこそ経験を受け取ることができるのだ、という私たちの日常的世界観以外の何物でもないのである。

純粹経験から説明するのであれば、その「論理」でさえ一旦エポケーする必要があるのだ。純粹経験として現れていない、ということはその「証人」でさえ一旦棚上げする必要がある、ということなのである。

つまり、

「証人」による「認識」⇒純粹経験、なのではない。

純粹経験⇒その経験を「認識」する「主体」「証人」がいるのではないか、という推論、

・・・なのである。ジェイムズの見解は純粹経験論からいえば全く転倒しているとしか言いようがない。

V. 主客の分離を説明するために分離した主客を前提としてしまっている

ジェイムズは、「意識」と「経験内容」という区別は、経験と経験（の集合）との関係、ある経験が解釈される“文脈”によりもたらされるものだと述べている。

わたしが信じるに、経験とはそのような内的二元性をもつものではない、経験が意識と内容に分離されるのは、引き算によってではなく足し算によってである——足し算とはすなわち、経験のある所与の一片に他の経験の断片の集合が加えられることによって、その一片がさまざまな仕方で、異なった二種類の用途あるいは機能を果たすようになるということである。（ジェイムズ、17 ページ）

ある所与の未分離な経験の一片が、他の経験と結びつけられるようなある文脈では、認識者の役割、精神の状態、「意識」という役割を演じ、別の経験と結びつけられるような別の文脈では、同じ未分離な一片として、認識されるもの、客観的な「内容」の役割を演じるということである。いいかえれば、それは経験のあるグループのもとでは思考として現れ、別のグループのもとでは物として現れるのである。（ジェイムズ、17 ページ）

・・・これらの具体的・比喩的説明として、ジェイムズは絵の具を例に挙げ、“他の絵の具と並べられて売り物としての役に立つ”（ジェイムズ、17 ページ）場合と、“キャンバスのうえに周囲を囲む他の絵の具とともに塗られ”（ジェイムズ、17 ページ）た“絵画の一部”（ジェイムズ、17 ページ）となった場合の違いを説明している。さらに別の例として、ジェイムズは下のように述べている。

読者も自分自身の経験に照らしてみれば、わたしがここでいわんとしていることを理解できるようになるであろう。まず、物理的な対象の知覚経験、いわゆる物理的対象の「現前」の例として、自分の実際の視覚野をとり上げ、自分が坐っている部屋と、その中心に位置する、現在読んでいる本を考えてみよう。（ジェイムズ、19 ページ）

・・・こういった状態において、一つの“逆説”が現れるとジェイムズは言う。

デモクリストス以来の知覚についてのすべての哲学は、明らかにひとつの实在であるものが、同時に外的な世界と人の精神の両方の場所に存在するという、この逆説をめぐる一連の長い論争を形作ってきたのである。(ジェイムズ、19 ページ)

・・・ジェイムズは、やはりこの逆説も純粹経験と別の(純粹)経験のグループとの結びつきによって説明できる、としている。

ひとつの同一の部屋がいかにしてふたつの場所に存在しうるのかというこの謎は、一つの同一の点がいかにしてふたつの線上に存在しうるのかという謎と、根本的には同じ問題である。ひとつの点にとってそれが可能なのは二本の線の交点にあるときである、同様にして、部屋についてのひとつの「純粹経験」も、ふたつの連合の過程の交点にあるならば、そうなることが可能である。ここでいうふたつの連合の過程とは、同じ純粹経験が別の経験から成る異なったグループと結び付けられることであり、その経験はどちらのグループにも属していて二度数えられるために、大雑把にはふたつの場所に存在するといわれるが、しかしそれ自身としては始めから終わりまで数的に単一なものなのである。(ジェイムズ、20 ページ)

・・・これらジェイムズの説明における問題点を指摘してみよう。

(1)「意識」と「内容」、「思考」と「物」、「物理的対象」と「自分の視覚野」との分離、つまり主客の分離を説明するために、主客の分離を前提とした客観世界認識を前提としてしまっている

ジェイムズは、部屋に自分が坐って本を読んでいる、という客観認識に基づいた世界観を前提として主客の分離を説明しようとしているのだ。では、この「部屋に自分が坐って本を読んでいる」という客観認識はいかに根拠づけられているのであろうか？

要するに、ジェイムズの理論は、

主客の分離した客観認識⇒文脈⇒(純粹)経験の解釈⇒主客の分離の根拠を説明

・・・という一種の“循環論理”に陥ってしまっているのだ。ジェイムズは、“経験の二元性とは関係の問題であり、単一の所与の経験に内属するのではなく外部にあるもの”(ジェイムズ、18 ページ)と述べている。この“外部にあるもの”とは、結局「部屋に自分が坐って本を読んでいる」という主客が分離した一般的客観認識のことなのである。

(2)「経験の断片の集合」「経験のあるグループ」=文脈なのか？

ジェイムズは「純粹経験」を解釈する“文脈”として「*経験のある所与の一片に他の経験の断片の集合が加えられる*」(ジェイムズ、17 ページ)と述べている。「*経験のあるグループ*」(ジェイムズ、17 ページ)とも表現している。

しかし、ジェイムズ自身が事例として挙げた「*読者の個人的な歴史*」(ジェイムズ、21 ページ)やら「*家の歴史*」(ジェイムズ、21 ページ)とは、単なる「*経験の断片の集合*」の一言で説明できるものであろうか？ さらに言えば「*家の歴史*」は「*純粹経験*」であろうか？

問題は、「*単なるあれ*」(ジェイムズ、21 ページ)を根拠に、いかにして「*読者の個人的な歴史*」やら「*家の歴史*」が形成されているのか、それら「*歴史*」が純粹経験によっていかに根拠づけられているのか(あるいは根拠づけられていないのか)、そこではないのか？

ジェイムズは純粹経験と「*歴史*」を含む客観認識との関係の検証をすつとばした上で、一般的客観認識を根拠に純粹経験を説明しようとしてしまったのである。

(3)「ひとつの實在であるものが、同時に外的な世界と人の精神の両方の場所に存在する」・「同一の部屋がふたつの場所に存在しうる」という“逆説”はどこにも生じていない

“*自分自身の経験に照らしてみれば*”、ジェイムズの言うような“逆説”はそもそも生じようがないはずなのだ。部屋を見ている、ジェイムズ自身が言うように「*目を閉じるか、ほんの一瞬でも空想に心を遊ばせるだけでかき消えてしまう*」(ジェイムズ、22 ページ)のである。リンゴを見ている、目を閉じればリンゴは消えてしまう。ただそれだけのことである。そのときそのリンゴがまだそこにあるのかどうかなど確かめようがないのである。私たちにほどこまでもその経験しか与えられていない。そもそもが「*ふたつの場所に存在*」しようがないのである。視覚のみではない。これは嗅覚やら触覚やらその他感覚についても同じことが言える。

同一の部屋がふたつの場所に存在しうると考えるのは、「*誰か*」が部屋の中にいる、という第三者的視点から見ているからなのだ。ある人間がある物を見ているとき、実物としてその物が「*存在*」している、そして、その物を見ている「*その誰か*」の視覚野になんらかの像が映っているであろう、という確信なのである。その**第三者的視点と、自らの主観とを混同(あるいは融合)**することで、**物理的實在物と、自らの視覚野の両方に対象物が存在している、と把握している**のである。この視点においては、**實在物と視覚野の像の双方があるのはあくまで客観的事実なのであって“逆説”などではない。**

さらに付け加えれば、ジェイムズは「*存在*」という言葉をわざと“**拡大解釈**”している。そもそも「*存在*」とは何なのか？ 存在とは物理的に實在している、あるいは物理的實在物が実際に引き起こした實在現象のことを言うのではないか？ 視覚野に映った像はそもそも「*存在*」でもなんでもないはずである。「*視覚野*」という認識は主客を前提として成立する概念である。純粹経験として説明するのであれば、そこに「*視覚野*」や「*物理的實在*」の

区別はないはずである（そういった意味でジェイムズは経験は一つと言っているのであるが、明かにその説明は大きくブレてしまっている）。

「物理的作業と精神的作業が奇妙なほど両立不可能」（ジェイムズ、21 ページ）と思うのは、第三者的視点を含む客観認識と、純粹経験とを混同してしまっているからなのである。

VI. 精神と実在への二重化は「文脈」によりもたらされるものではない

次にジェイムズは“話題が知覚対象から概念に移り、現前しているものの場合から遠く離れたもの場合”（ジェイムズ、22～23 ページ）について検討している。これについては、私たちに与えられている経験は一つしかないということを考えれば、既に解決している問題である。

わたしがいま探しものをしている部屋のなかの物と思い浮かべている遠い過去の家、あるいは、現在の物とずっと昔の少年時代の物は、同じようにわたしに影響を与え、わたしのそれらの経験が直接に感じるあの現実感を伴って、わたしの行動を規定する。それらはともにわたしの現実世界を構成し、しかも直接的な仕方で構成する。それらはまず他所から導入され、わたしの内に今現在ある観念によって媒介されて、間接的にわたしの世界になるというわけではない。（ジェイムズ、27 ページ：ミュンスターベルク『心理学の綱要』からの引用より）

・・・細かい表現についてはさておき、大まかには同意できる内容である。**実物であろうが想像物であろうが、経験としては「直接的」**なのである。上記の“わたしの内に今現在ある観念によって媒介されて、間接的にわたしの世界になるというわけではない”というのはまさに経験の具体的事実を正確に説明しているものだと言えよう。「観念」による「媒介」がなされたという具体的事実、純粹経験の事実など、どこにも見当たらないからだ。ただ、

夢見る人や幻覚に襲われている人がもつもろもろの対象は、完全に一般的妥当性を欠いている。とはいえ、それらの対象がケンタウロスや黄金の山であったとしても、それらは「外のそこ」に存在し、童話の世界にあり、われわれの「内側」にあるわけではないのである。（ジェイムズ、27 ページ：ミュンスターベルク『心理学の綱要』からの引用より）

・・・この説明はいくらか不正確である。「外のそこ」に存在しているという根拠もみあた

らないからだ。より正確に説明するとすれば、「外も内もない」ということなのである。純粹経験には外側も内側もない。なぜなら**純粹経験は“認識”されるものではない**からだ（既に述べたように純粹経験に「証人」は必要ない）。

それでは、実際に私たちが、「外側にあるもの」「内側にあるもの」、「精神」と「實在」、**“「対象の思考」と「思考される対象」**”（ジェイムズ、29 ページ）とを区分する根拠とはいったい何なのであろうか？

ちょうど（前の例に戻っていうと）見られた部屋が同時に意識野でもあるように、概念的に把握された部屋、あるいは想起された部屋もまた、同時に精神の状態でもある。そしてこの経験の二重化はどちらも同じ根拠によって生じるのである。（ジェイムズ、28 ページ）

・・・ジェイムズは、この「精神の状態」と「實在性」との分離もやはり、實在物の知覚と同じ論理により生じていると述べている。しかし既に私が否定したように、この「経験の二重化」とは“文脈”によって生じているものではないのだ。

具体的には、ジェイムズは以下のように説明している。

家の歴史のなかではそれは永続的な構成部分となっている。思考されたものどうしのいくつかの結びつきには、ロイスの表現を借りるならば、事実のもつ奇妙な頑固さといったものがそなわっている。他方の結びつきには空想につきものの流動性がある――われわれは好きなようにそれを去来させることができる。（ジェイムズ、28 ページ）

経験のこの二つの集合は、一方が密接な結合をもち、他方が緩い結びつきしか示さない（ジェイムズ、29 ページ）

さらにジェイムズは少し前の文章においてより具体的に説明している。

部屋としては、それを壊すのは地震や一団の人々の力を必要とするかもしれないが、いずれにしても一定の時間を必要とする。あなたの主観的な状態としては、それは目を閉じるか、ほんの一瞬でも空想に心を遊ばせるだけでかき消えてしまう。現実の世界では火事がそれを燃やすだろう。あなたの精神のなかでは、たとえ火をつけても燃え上がることはない。外的な対象としては、あなたはそのなかに住むために月々の家賃を必要とする。内的な意識内容としては、あなたはただで好きなだけそれを占有できる。要するに、あなたがそれを自分の個人的な伝記的出来事の線に沿って精神的な方向に辿るならば、真となるであろうことが、それを経験される實在的な物として物理的な方向に辿り、外的世界の他の仲間の物と関係づけるならば偽となるであろうし、またその逆のことも起きるであろう。（ジェイムズ、22 ページ）

・・・これはいかなることを示しているのでしょうか？たとえば、空想の中では簡単に家を壊せる、実際の家では自らが手をくさなければ家を壊すことはできない・・・要するに、空想⇒壊れる、実在物⇒壊れない、といった「因果関係」なのである。ここでジェイムズが「自分の個人的な伝記的出来事の線」と呼んでいるものは「因果関係的把握」「因果関係の連鎖」のことなのだ。部屋は、目をつぶってしまえばその状況は消えるが、また目を開ければ再び現れる。自分が動かないのに勝手に部屋の配置が変わることは（他の人や現象が手を下さないかぎり）はない。これが上記の「事実のもつ奇妙な頑固さ」と呼ばれているものであろうと思われる。一方で「空想につきものの流動性」と表現されたように、想像は次々に情景を変化させることもできるし、部屋の配置を自分の体を動かさずに変化させることもできるのである。実際、ジェイムズもどこまで自覚しているのか分からないが、

精神的なナイフは鋭く尖っているかもしれないが、本物の木を切ることはない。精神的な三角定規も尖っているが、傷をつけることはない。これとは反対に、「実在的」なものの場合には、つねに結果が生じることになる。そこで実在的な経験は精神的な経験からふるいにかけて、物はそれについての真なる思考、あるいは空想的な思考からふるいにかけて、全経験の混沌のなかの安定的な部分として、物理的世界名のものに、ひと塊のものとしてされるのである。この物理的な世界の核となるのはわれわれの知覚経験であり、この経験が最初から強固な経験をつくるのである。（ジェイムズ、40 ページ）

・・・というふうに、ある経験とそれがもたらす「結果」、つまり「因果性」により精神と実在物との区分がなされているような説明をしているのだ。

もちろん、これらの区分は絶対的なものではない。私たちの経験において何が実在物なのか、何が想像だったのか、その区分が明確でない事例はいくらでもある。「私」の「外側」と「内側」の区分は絶対的なものではないのだ。ジェイムズ自身、

もしも「主観」と「対象」とが「存在全体を二分する直線によって端から端まで」分離されており、共通する属性を何ももたないのだとしたら、われわれに現前しそれと認知されている物質的对象にかんして、感覚器官に由来する部分と、「自分の頭」に由来する部分とを区別することが、これほど困難であるのは何故なのであろうか。（ジェイムズ、36 ページ）

・・・と述べている。そして既に述べたように、個別事実の因果的把握により、このような場合は「実在」「外側の出来事」、このような場合は「精神」「内側の出来事」・・・というふうな区分がとりあえずなされているわけである。

われわれは経験それ自体においては、表象されることと表象することの二元性はどこにも存していないことを銘記しなければならない。それが純粋な状態にあり、孤立しているときには、意識と、意識が「それについて」であるところのもの、というふたつのものへの自己分裂は、存在していない。(ジェイムズ、30 ページ)

・・・これについては全く同意する。ただ、

その主観性と客観性とは機能的な意味での属性にすぎず、その機能は、経験がふたとおりに「把握される」こと、つまり二重に語られ、それぞれ異なった文脈に沿って考慮されることによって実現される。(ジェイムズ、30 ページ)

・・・この説明はおかしい。「機能的な意味」とジェイムズは述べているが、「因果関係」「因果性」に基づいた客観認識のことなのである。決して「文脈」のことではない。

そして同じ経験が「内側」「外側」として二重に語られるのではない！ たとえばあるイメージが沸いてきた場合、それはあくまで「内側の経験」として語られるのみであり、それは決して「外側の経験」などではないのだ。

意識とは一種の外的な関係を意味する言葉であり、特殊な素材や存在の仕方を指示する言葉ではない。われわれの経験は、単にそこにあるだけでなく認識されてもいるという特異性のゆえに、その説明として経験の「意識的」な質ということが要請されたのであるが、この経験の特異性は、それらどうしの関係によって説明する方が適切である——そして、この関係そのものもまた経験なのである。(ジェイムズ、31 ページ)

・・・具体的経験として「意識」あるいは「作用」というものなど現れていない。またそれを「認識」するための「主体」というものも要請などされていないのである。

それらはあくまで、物理的実在物があり、「私」がいて、「私」がそれを見ている、その「私」の脳裏にその「像」が映し出されている、という一般的客観認識を前提としたものであって、その場合において「私」に現れるもの、それが「意識」なのである。「私」という物理的実在物が存在し、その「私」に経験（見えるもの、聞こえるもの、感じるもの、あるいは何等かのイメージや言葉やら）が現れてくる、その現れてくる状況のことを「意識」と呼んでいるのである。物理的実在物としての「私」が確信されているからこそ、その「外」「内」という、これまた物理的空間把握にもとづいた区分も可能となるのだ。

Ⅶ. ジェイムズの因果関係に関する認識はひっくり返っている

ジェイムズは、第二章 純粹経験の世界において、

そして作用という関係があり、項どうしを結びつけて、変化、傾向、抵抗、そして因果的秩序一般から成る、一連の出来事を生じさせる。(ジェイムズ、51 ページ)

・・・と述べている。ジェイムズの見解は、作用⇒因果性把握、となってしまうのだ。因果性を把握するための「作用」とはいったい何なのか？ しかし、そのような「作用」は具体的経験の事実として現れて来てなどいない。ジェイムズの見解だと、ではその「作用」は何なのか・・・結局、脳やら精神の機能ではないか、という一般的客観認識に戻ってしまうのではなかろうか。

そうではない。**因果性そのものが「作用」**なのである。ある経験と経験、ある事象と事象とが繋がった、例えば手に持ったリンゴを離すと地面に落ちた、そういった具体的事実どうしの関係構築、それこそがまさに因果関係なのである。そしてその**因果関係（の連鎖）が「作用」として認められる**のである。

作用⇒因果関係、ではなく、
因果関係⇒作用、なのである。

ジェイムズは“**関係そのものもまた経験なのである**”（ジェイムズ、31 ページ）と述べている。しかし「**関係そのもの**」という**具体的経験**はどこにも現れていない。あえて言うのであれば、実際に現れるものは、関係が繋がった、関係づけられたという経験であろうか。しかしその場合においても、その関係を「認める主体」というものはどこにもないし、そこに「証人」を立てる「論理的要請」などどこにもないのである。「証人」がいようといまいと因果性が形成されたその事実は具体的経験であるからだ。そして、その関係とは当然「文脈」のことでもない。

VIII. 純粹経験が「まさに現れるとおりのもの」ならば言葉も純粹経験ではないのか

ジェイムズは純粹経験について次のように説明している。

今や経験一般がそれによってつくられている一般的な素材など存在しない、といわなければならない。経験の素材は、経験されるものの内にある「本性」と同じ数だけ、多くのものが存在する。もしも、いずれか一片の純粹経験について、それは何からできているのかと問われるならば、その答えはいつも同じである。「それはあれからできている、つまり、まさに現れるとおりのものからできており、空間から、強度から、平坦さから、茶色さから、重さから、等々からできている。」(ジェイムズ、33 ページ)

・・・経験はまさに「現れるとおりのもの」のものである。要するに実際に経験していることが純粹経験なのである。ごくごく当たり前の話である。ただ、そのとき**経験が素材により構成されているのではなく、経験そのものが構成され素材となるのである。**

ただ純粹経験に関するジェイムズの見解は一つの大きな「欠陥」を抱えているといわざるをえない。それは、**純粹経験が「まさに現れるとおりのもの」であるのならば、浮かんできてしまった言葉、喋ってしまった言葉、それさえも純粹経験であるはずなのである。純粹経験としての言葉は、それが音素によって構成されているとか、文字としてどのような形をしているのか、ということとは問われない。**それらはその対象物（音や文字）をさらに詳細に調べた上で新たに発見される要素・素材なのであり（「リンゴだ」と浮かんできた経験とはまた別の純粹経験）、例えばある物を見て「リンゴだ」とふと思ったその時点において、そんなことは関係ないのである。

また、“同一の純粹経験の一片が、二度数えられて、ここでは思考として働き、そこでは物として働く”（ジェイムズ、34 ページ）ようなことは経験の事実として認められない。そのような事実はどこにもないのである。既に述べたように「思考そのもの」という経験などどこにもないのである。では、思考とはいったい何なのであろうか？

既に述べたように、純粹経験とは実際に経験したこと、見えたもの、聞こえたもの、感じたもの、あるいは浮かんできたイメージやら、さらには言葉、といったものである。また経験と経験とがつながった、その事実も純粹経験である（ただし「関係そのもの」という経験はないことは既に述べた）。このとき、

- (1) 言葉（これも経験）と経験とがつながる経験＝言語表現
- (2) 経験と経験とがつながる経験＝因果関係

これらの関係ができる一連の経験を「思考」と呼んでいるのである。ちなみに同一性や相

違の認定も、上記の言葉と経験とのつながりの確認作業である。

あるいは無意識に状況判断し行為に至る場合も一般的には思考と呼ばれるのかもしれないが、これら無意識のプロセスは具体的経験として現れない故に、**純粹経験**ではない。あくまで具体的経験（純粹経験）を因果関係により結び付け因果の連鎖を形成して導き出す客観概念であるといえる。

いずれにせよ「思考そのもの」「作用そのもの」「関係そのもの」という単独の具体的経験（純粹経験）はどこにも見当たらないのである。**純粹経験には主体そのものがない、あるのは具体的経験内容のみである**。それ故に、“能動的に作用する”ような“思考のはたらき”といった**具体的経験も当然現れることはない**のである。

これまでの説明を考えれば、わざわざ述べるまでもないが、

この「わたしは思考する」とは、まさしくすべての対象に実際に伴っている「わたしは呼吸する」のことである。(ジェイムズ、44 ページ)

・・・というジェイムズの見解は非常に的外れ、「思考」の説明に全くなっていないことは明らかであろう。

IX. 価値評価も純粹経験に還元可能である

ジェイムズは、価値評価的経験について、下のように述べている。

これは存在の両義的な領域を構成しているのであり、それというのも、この種の経験は一方で情念に属するとともに、他方で客観的な「価値」をもっており、純然たる内的なものでもなければ純然たる外的なものでもなく、あたかも主客の二分がすでに生じながらも、完遂していないような性格をもつからである。(ジェイムズ、41 ページ)

・・・ジェイムズの説明はあまり歯切れがよくない。

最初は混沌としていた非常に多くの純粹経験が、徐々に秩序立った外的経験と内的経験とに分化されていく過程を、進化論的に構成しようとするならば、その種の説明自体が成功するかどうかは、あるひとつの経験がもつ性質が、当初は能動的な作用をもつものでありながら、後にはそれほどのものではなくなるのはいかにしてであり、また何故なのか、そして、その質がある場合にはエネルギー的な属性であり、別の場合には不活発な、単なる内的な「本性」となるのはいかにしてであり、また何故なのかということの説明できるかどうかにかかっているであろう。これは物理的なものの内から心理的なもの

の「進化」を構成するということになるが、そこにあっては、審美的、倫理的、その他の情緒的経験がその中間段階をなすことになるであろう。(ジェイムズ、42～43 ページ)

・・・なぜここで「進化論的に構成」する必要があるのだろうか？「エネルギー的な属性」とはいったい何なのか、またそれがなぜ「外的経験」と「内的経験」の区分の根拠になりうるのか、まったく謎である。

要するに、「価値」とは何か明確に理解していないからこそその迷いなのである。実のところ、ジェイムズが“純然たる内的なものでもなければ純然たる外的なものでもなく”と思うことには確かに理由があるのだ。どういうことかということ、例えば、外的実在物である（と確信されている）とある絵画を見たとき、ある人が心に沸き立つ何かを感じたのであれば（それを「感動」と呼ぶこともあるだろう）、その人にとってその絵画は価値があると思うのであろう。何も感じず、ふと見かけただけで通り過ぎたのであれば価値がないと思うのではなかろうか。そして、その絵画に多くの人が感動したのであれば、その絵画に「客観的価値」があるかのように思えるかもしれない。つまり、価値とは実在物に対する人々の内的情緒にかかわる問題であるが故に、外的・内的の区別がつけにくいということなのだ。

あるいはある政治家の政策信条について、その政策が実行された場合の結果（あるいは予想される結果）に対し、人々が良好な心情を感じているとしたら、その政治家の価値観が認められていると言えるだろう。価値観といえども、具体的に実在する物・人・状況・現象への働きかけのやり方（そしてそれに対する感情・情緒的な印象）なのである。それ故に、外的・内的双方の要素がかかわっているのである。つまり、「価値」が外的・内的の「中間段階」(ジェイムズ、43 ページ) だとするジェイムズの判断は正しくないと言える。

ただ、いずれにせよ、絵画であろうと社会現象であろうと、究極的には純粋経験に還元されうるものである。外的実在物といえども、外的に実在しているという確信であるにすぎない。結局、純粋経験としてはそこに見えているものなのである。

X. おわりに

ジェイムズは純粋経験という非常に重要な概念を導き出した。経験として「現れるとおりのもの」から哲学を構築しようとする姿勢は重要であると思うのだ。なぜなら、具体的経験そのままの事実、純粋経験は、それ以上疑いようのない明証性を有する事実、“「最終的な証言」であって、それ以上の批判者をもつことがない”(ジェイムズ、31 ページ) ものだからである。

それ故に、そこに推論が決して入り込んではいくならないのである。経験として「現れるとおりのもの」でない要素を決して介入させてはいくならないのだ。それが論理的に必然であると思われたとしてもである。そして、その代表が「作用」なのである。「意識の作用」「思

考の作用」というものは、経験と経験とをつなげて導かれた想定概念であり、具体的経験として現れることのないものなのである。

- ※ 因果性、論理、同一性などの問題については、拙著、
「アイデア」こそが「概念の実体化の錯誤」そのものである
～竹田青嗣著『プラトン入門』検証
(URL: http://miya.aki.gs/miya/miya_report11.pdf)
で詳細に説明しているので、興味のある方は読んでみてください。